

野島崎への艦砲射撃 ～ 安房中生の犠牲と安房の本土決戦体制

山口栄彦（『消えた砲台 - 少年と館山砲術学校』著者）

私は 1930（昭和 5）年に布良で生まれた。安房中学校 3 年の 1945（昭和 20）年 7 月 18 日、夜に現南房総市白浜町（旧島原村）が艦砲射撃を受け、住民に被害があり、同級生の水口（旧姓小山）清六君（15 歳）が亡くなった。戦後、島崎地区の法界寺に戦没者の忠魂碑が建てられ、艦砲射撃で亡くなった 6 名の名前も刻まれている。2012 年 3 月 20 日、同級生 9 名が傘寿に合わせて集まり、水口君を偲ぶ会を開いた。

当時、軍当局は住民に対して「潜水艦からの砲撃」と発表し、新聞などでも報道されており、近年までそれが事実として語られていた。この艦砲射撃は、野島崎灯台のある島崎地区への着弾が多かったことから、国際法上禁止されている灯台を狙ったものとされていた。しかし、灯台北方 1 キロの城山に陸軍のレーダー基地があることは公然の秘密であった。安房地域一帯に、深夜鳴り響いた砲音の大きさから、潜水艦の砲撃とは思えないのに、軍当局はなぜ虚偽の報告をしたのだろうか。

敗戦後に作成された『米軍戦略爆撃調査団最終報告書』によると、7 月 18 日 23 時 52 分から 5 分間にわたって陸軍白浜城山レーダー基地への艦砲射撃概要とその効果が記載されている。内容は、第 3 艦隊司令官から派遣命令を受けた第 38 機動部隊第 35・4 任務群の巡洋艦 4 隻と駆逐艦 9 隻が、16 キロ海上から夜間レーダー照準によって、6 インチ HC 砲弾 240 発を打ち込んだとある。だがレーダー基地には命中せず、付近の島崎村に 37 発が着弾し、6 名死亡 17 名が負傷したという。軍当局が村民たちには、潜水艦からの砲撃と説明したとの証言が書かれている。

ところで、陸軍白浜レーダー基地への艦砲射撃は、戦局のなかでどんな意味があったのであろうか。1945 年 6 月 21 日に米軍が「沖縄全島確保宣言」後、ハルゼー大将が率いる 105 隻の米海軍太平洋艦隊第 3 艦隊第 38 機動部隊は、7 月 1 日に本土侵攻事前作戦にでた。その任務は日本軍に残っている艦艇や航空兵力を壊滅させるとともに、戦争継続に関わる軍事施設・基地を破壊することで、本土侵攻作戦をスムーズにすることにあった。10 日には、艦載機が関東の航空機基地を目標に空爆をおこない、米機動部隊による本格的な攻撃が開始された。そして 14 日朝に、釜石の製鉄所に対して戦艦による本土初の艦砲射撃をし、15 日には室蘭の製鉄所に、17 日夜、鹿島灘から日立、水戸に艦砲射撃を実施した。

この 16 日からは、連合国首脳がポツダム会談で対日作戦を話し合い、アメリカは原爆実験の成功を背景に、戦後世界での対ソ連との対応を模索していた。また対日作戦において第 3 艦隊は、ソ連参戦前にして日本本土の制海制空権を完全に確保する必要があった。本土侵攻作戦上、東京湾口南方 16 キロ海上地点に接近し、海軍の水上空特攻作戦を警戒しながら、白浜だけではなく、千倉・布良のレーダー基地や、高射砲などの射撃用レーダーを探索したと思われる。ポツダム会談期間中も、B29 による無差別爆撃は熾烈を極め、早期無条件降伏のために第 3 艦隊の任務が遂行されていた。沖縄戦が終わって 7 月に入ると、安房での決戦部隊の動きが激しくなる。

軍当局が住民に「潜水艦からの砲撃」と虚偽の説明をした背景には、米軍の本土上陸が近いと知られると、住民たちが軍の統制に従わない可能性があると考え、情報操作を続けながら「一億総特攻」を住民に強要しようとしていたのかもしれない。